

2017年度(平成29年度)十日町幼児園自己評価

1、園の保育目標

キリスト教精神により愛と平和と人権を大切にした保育

1. キリスト教保育
2. 一人ひとりの育ちを大切にする保育
3. 生命の輝きを知る保育

大人の都合や価値観が優先され、これが良い教育だと錯覚されることが多い中、「遊ぶこと、甘えること、愛されること」など、本来子どもが最も必要としていることを大切にしています。今受ける愛が人生の輝きの源になる、これが私たちの保育です。

2、本年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画をもとに設定した園の評価の具体的な目標や計画

- ①子どもたちが安心して幼児園での生活を送るようにする。
- ②礼拝や誕生会や日々の生活を通して、自己肯定感(自尊感情)を身につける。
- ③子ども自身が遊びや生きた体験学習を通して自発性・自主性を高める。
- ④ケンカなどのぶつかり合いや日々の生活を通して、友だちを尊敬し、周りの人に感謝することによって協調性(思いやり)を育てる。
- ⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育する。
- ⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営していく。
- ⑦日々の生活を通して、子どもと保育者、保護者と保育者が信頼関係で結ばれること。
- ⑧食事への意欲を養い、共に食卓を囲む喜びを体験する。
- ⑨地域社会の中の保育園として、地域に開かれた保育園として地域住民との交流をより促進する。

3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	現 状 分 析
①子どもたちが安心して生活し、いきいきしているか。	泣いたり、笑ったり、怒ったり、自分の感情を出して生活している。それは安心して生活している環境だからこそ出せているように感じる。おとなしい子どもへのより丁寧な対応や配慮は必要である。
②子どもたちの自己肯定感（自尊感情）が育っているか	年齢が上がるにつれて、自信をもって意欲的に物事に取り組むようになる子どもが多く見られる。ただし、家庭環境や様々な事柄も絡み合せて、自尊感情がなかなかもてず、自信のなさや他児に攻撃的になる姿を見せる子どももいる。その子たちへのより細やかなケアが必要である。
③子どもたちの遊びを通して自発性・自主性を発揮し、また保育者が子どもたちにとってよき援助者となりえているか	保育時間の組み立て方で、遊びが中途半端になっている様子がある。保育者の計画性（子どもの発達をとらえた）イメージがないままの活動になっている時もある。子どもの姿から心の動きを観ている保育士は必要な援助ができています。
④子どもたちが日々の関わり合いの中で、互いを思いやる心が育っているか	友だちの存在を大切に思う様子が、3才以上児になるとよく見られるようになるが、0～2才児はもちろん、3才以上児でも友だちとかかわることよりも、一人遊びや自分が満たされたい思いが強く、友だちを他者として理解することが乏しい様子も見られる。
⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育しているか	年齢に応じてだけでなく、その時の子どもたち一人一人の姿を受け止め保育しようとしている。ただ、デイリープログラムの進行を気にして、今の姿を十分に受け止められず、焦る姿が見られる時もある。
⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営しているか	園長や主任保育士はもちろん先輩・後輩の関係においても、報告・連絡・相談も含め連携はよく取れている。複数担任のクラスはより高みを求めて連携していくことが求められる。
⑦子どもと保育者、保護者と保育者の間に信頼関係が結ばれているか	子どもたちと保育者の信頼関係、保護者と保育者の信頼関係は基本的には結ばれている。その証拠に、当園は管理職への苦情がほとんどなく、心配なことは保護者が担任に直接相談できる信頼関係がある。これからもより深い信頼関係が築けるように、日々丁寧に保育しそれを報告・説明できる姿勢が求められる。
⑧食事への意欲が育ち、共に食卓を囲む喜びを子どもたちが感じているか	食事料など個人差に合わせて加減したり、自分で食べられた意欲へとつながっていく対応をしている。子どもの食事に関する状況や相談も栄養士が定期的に受け付けている。
⑨地域にある園として地域に開かれ、地域住民とのこうりゆうが図られているか。	今は交流は少ないが、地域の方が積極的に声をかけてくださったり、園庭の見守りもしてくださっている。もっと交流を深めていきたい。

4、評価項目の取組をより深めるために保育者がどのように対応するのか

評価項目		保育者がどのように対応するのか
①子どもたちがいきいきして過ごすために	⇒	全職員が笑顔で向き合い、子どもたちを丸ごと受け止められること、意欲的に遊び又生活し、時間に区切られることをなるべく少なくしていく。
②子どもたちの自己肯定感（自尊感情）が育つために	⇒	“自分はここにいていいんだ”という思いを子どもが持てるように、全職員は子どもたちの味方であり、子どもたちの思いを大切に受け止め、小さな成功体験(喜び)を積み重ねていけるように配慮する。また子どものがんばりを認めていく。
③保育士が子どもたちにとってよき援助者となるために	⇒	子どもたちの今の姿を肯定的な視点で見つめるなかで、新たな発見を与えられると信じる。そして行き当たりばったりではなく、準備して保育に臨み、常に振り返りを行い、試行錯誤を繰り返しながら保育していく。
④子どもたちの互いを思いやる心を育てるために	⇒	保育士・職員が子どもたち一人一人の良い所に目を向け、一人一人を肯定するまなざしを向け、声掛けをしていく。職員同士や職員が子どもを思いやることで、子どもは思いやりのある人に育っていく。
⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育するために	⇒	全職員が定期的に各種研修に出席することはもちろん、日々保育所保育指針を見直し、職員会議における学びも継続していく。クラス内の連携はもちろん、全職員が子どもの育ちを共有して共に育ちあっていく土壌を醸成する。
⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営するために	⇒	管理職はもちろん、全職員がリーダーシップを発揮できるようにする。そのためには、常に共に学ぶ姿勢をもつことと、特に管理職が肯定的まなざしや態度をもって全職員に接していくことが求められる。
⑦子どもと保育者、保護者と保育者の間に信頼関係が結ばれるために	⇒	子どもや保護者が「自分は受け入れられている」という実感をもてること。そのためには担任はもちろん、すべての保育者や職員がいつも肯定的まなざしと慰めと励ましを注ぐことに注力することが大切である。
⑧食事への意欲と、共に食卓を囲む喜びを実感するために	⇒	保育者自身がまず楽しい食卓を作り出すことが大切である。食事マナーも大切であるが、食卓が「小言を受ける場」になるのではなく、楽しく笑顔で集える場所になることが大切であり、栄養士・調理員との連携をより密にしていく。
⑨地域に開かれ、地域住民と交流を図るために	⇒	いつも子どもたちのために配慮や見回りをしてくださっている地域の方と共に昼食を食べるなどの行事を今後取り入れていく。

5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
職員同士の保育理念の共有をより深く	<p>当園は、就職以来ずっと勤めている職員が多くいる一方、他の幼稚園・保育園からの転職者や他業種からの転職者もいる園です。それぞれが違った視点をもっている点は当園の強みであると思います。同時に課題としては、連携がとれないとそれぞれがバラバラの保育イメージで進んでいく可能性もあります。ですから常に当園の保育理念や子ども観を共有していく必要があります。これらは上からの押し付けで教える意味はなく、共有すべきものであると考えるので、これからも当園独自の研修などで常に確認していく必要があります。</p>
より地域に開かれた保育園として	<p>当園周辺のみならず、十日町市周辺は子どもへの理解がかなりある地域であると思います。少子高齢化が進んでいるため、子どもたちを「地域の宝」としてとらえてくださいます。当園周辺に在住の方々も常に温かい声をかけてくださり、また園庭などで子どもたちが遊んでいる様子をご覧になって、子どもたちにも温かい声をかけてくださいます。子どもたちの住民の方々の存在を知っており、温かな交流が続いています。</p> <p>そんな地域の方々を園にご招待し、共に給食を食べるなどの交流をこれから増やしていくことができると考えています。十日町幼稚園が地域の拠点(居場所)として、誰もが立ち寄れる園としていきたいです。</p>
送迎マナーの向上	<p>当園のハード面の課題の一つに駐車場が少ない点が挙げられます。駐車スペースが3台分しかなく保護者の方々にも不便をおかけし、地域住民の方々にもご迷惑をおかけしている面もあります。保護者の方々の送迎の安全を確保し、送迎のマナーをよりこまめに伝えていく必要性があります。また駐車場が混み合う時間帯には、職員が立って誘導などを行う必要性もあると思います。</p>